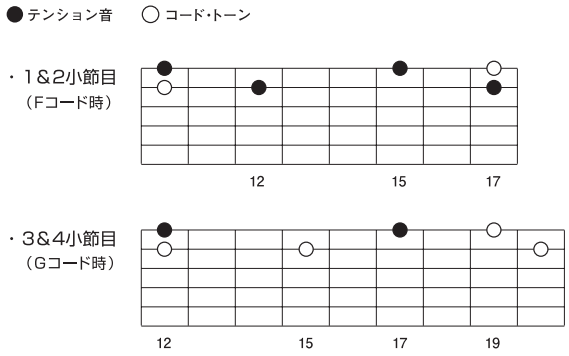
注意点1 理論

不思議な雰囲気を生む出すペンタの必殺活用法

このメイン・フレーズは、スティーヴ・ヴァイ風ということもあって、彼らしいテンション音を取り入れた独特なフレージングになっている。ただし、実は使用しているスケールはEマイナー・ペンタだけになるのだ。このフレーズのキーはCメジャーになるので、通常ではCメジャー・ペンタ（Aマイナー・ペンタ）を使用することが多いが、あえてEマイナー・ペンタを使うことでテンション音を加えることができる(**図1**)。また、1&2小節目ではFコードをバックにしながら、F音を一切使用しないので、ソロ・プレイとバッキングが合わないミステリアスな雰囲気を醸し出せるのだ。ちなみに**正式なスケール名【註】**は、1&2小節目はFリディアン、3&4小節目はGミクソリディアンになる。

図1　マイナー・ペンタを活用した応用ポジション



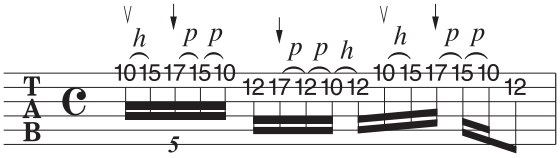
あえてEマイナー・ペンタを使用することで、テンション音を自然に加えることができる。

注意点2 理論

言葉をあてはめて歌いながら弾くべし！

メイン・フレーズ2&4小節目1～3拍目は5連符と16分音符になっているので、リズムの取り方に注意が必要だ。5連符は8分音符や3連符に比べてリズムが取りづらいので、5文字の言葉を当てはめて歌いながら弾くと良いだろう。2拍目では5連符から16分音符に変化するが、誤って16分音符を5連符で弾いてしまわないように気をつけなくてはならない。16分音符なので4文字の言葉を当てはめると良いが、3拍目へスムーズに繋げることも考慮して、3拍目1音目までをセットにしてリズムを取ろう。1拍目＝5文字、2拍目＝4文字、3拍目1音目＝1文字ということで、“メカニカル・ダイスキ・ダ”（メカニカル大好きだ！）と歌いながら弾いてみてほしい（**図2**）。

図2　5連符＋16分音符フレーズのリズムの取り方



メカニカルダイスキダ

3拍目の1音目までをセットにして捉えることで、音を滑らかに繋げることができる。

～コラム28～

教官の戯れ言

イングヴェイと同様に、スティーヴ・ヴァイも地獄読者にとってはもはや説明する必要がない超絶ギター界のトップ・アーティストになるだろう。圧倒的なテクニックを土台にしたトリッキーでエキセントリックなプレイは、音楽というジャンルを超えたまさに“一大アート”と言っても過言ではない。また、バークリー音楽大学で学んだ採譜能力は、フランク・ザッパも認めるほどで、自身の楽曲も記譜作業から生み出すこともあるそうだ。彼は“テクニック・表現力・理論”、そのすべてにおいて世界最高峰の実力を有するギター・ヒーローの頂点だと言えるだろう。

著者・小林信一、かく語りき スティーヴ・ヴァイ編

スティーヴ・ヴァイ
『パッション・アンド・ウォーフェア』
1990年に発表されたギター・インストの超名盤。超絶技巧と多彩なサウンドが満載で、彼の音楽性の高さを見事に証明した1枚だ。

ヴァイ
『セックス・アンド・レリジョン』
凄腕ミュージシャンを集めて制作した歌ものアルバム。アバンギャルドさとキャッチーさが絶妙なバランスで融合した力作。

【正式なスケール名】スケールの構成を紹介すると、1&2小節目のFリディアンはF音・G音・A音・B音・C音・D音・E音、3&4小節目のGミクソリディアンはG音・A音・B音・C音・D音・E音・F音になる。